――ところが、蓮子はうんざりしていた。

ことのはじめは、サークルの活動である。九月の半ばに遠野に行こうと。かの柳田御大が愛した地であるし、暴けそうな結界の一つや二つあるだろうという寸法だ。

無計画な理屈であった。無計画ついでいえば、経済的にもそうだった。日頃からろくにバイトもしないくせに毎日喫茶店でミーティング――茶会――などしていれば、金など貯まろうはずもない。旅行どころか、一月暮らすのもいっぱいいっぱいである。

間の悪いことには、この旅行、自分の方から提案したものだった。言い出しっぺが行けませんでした、では、あまりに格好がつかない。

自分の見通しのなさに、彼女はほとほと呆れていた。しかし、「うんざり」したのはそこではない。

とにかく、金が必要である。ところが、一般のバイトの給料というのはだいたいが安い。しかも翌月払いだ。それでは間に合わない。頭を抱えていた蓮子だが、捨てる神あれば拾う神あり、である。ネットを探す内に、天佑のような求人を見つけた。

募集を出していたのは、「宗像製造所」とかいう隣県の町工場だった。検索すると、どうも山奥にあるらしい。だが、それをおいても魅力的な条件だった。一月住み込みで二十万、最終日に現金払い。つまり八月末日に、二十万がぽんと手に入るわけだ。

渡りに船とはこのことだった。取られてはなるまいと、即日連絡を入れた。
　対応したのは男性だった。事務員の女性が海外旅行に出るのだが、男連中は机仕事が全くできないので代わりを頼みたい、ということだった。こちらが酉京都大の学生だと名乗ると態度が急変したのには笑った。世間のイメージというのは重要である。
　そして今、八月一日、つまりバイト初日である。電話に応対した男、宗像雄三――社長じきじきに電話をとったらしい――がわざわざ京都まで彼女を迎えに来てくれた。喫茶で待ち合わせて。パフェもおごってくれた。至れり尽くせりである。
　ところが、蓮子はうんざりしていた。
　宗像は、「おっさん」という言葉に付随するイメージを具体化したような男だった。地肌を隠すため、少ない頭髪を横に流したバーコード。目下には大きな黒子。法令線の浮かんだ口元、剃り残した口ひげ、たるんだ顎と膨らみ過ぎの腹。動物に喩えればわかりやすい――ガマガエルだ。
　外見はともかくとしても、宗像の饒舌さと、その内容のくだらなさには閉口した。地元の学生が来ると思っていたら酉京都大の子から電話があってびっくりしただの、今日はとんでもなく暑いだの、大学では何を学んでいるのかだの、野球は好きかだの、単に声を出すという行為が好きなだけなのではないかと疑うほどだ。例えばこれが、

今後一月の仕事についての話ならまだよかったのだが。こちらから振れば良かったのだろうが、次から次へ話題を繰り出され、機会を逸してしまった。

立て板に水という表現の似合う言葉をようやく途切らせ、宗像はアイスコーヒーのストローに口をつける。チュゴゴ、と啜った後、ぬるいなぁ、と眉をしかめた。

「ってうわ、もう一時間も経ってたのか。悪いねぇ宇佐見さん。私はどうも、初対面の人相手だと話しすぎるきらいがあってね。ちょうど先日も――ああいや、そんな話はまたあとでいいや。車に部下を待たせてあるんだ。きっと今頃しびれを切らしてるだろうなぁ。最近の若い子は堪え性がなくっていけないよ。僕が会社員だった頃は、いやいやそれもどうだっていいんだ。とりあえず出ようか。仕事の話は道中しようか。車で一時間くらいはかかるからね。会計済ましておくから、先に外、出といて」

勘弁してくれという思いが伝わったか、態度に出ていたか、宗像はようやく、脇に逸れそうになりつつも、話を切り上げた。

ご馳走様ですと伝えると、ああいいよいいよそんなの、若い人は奢られるべきだ、僕もね――などと話が広がりかける。じゃあ先に外で待ってますね、と、慌てて店のドアをカラコロと鳴らした。八月の日本晴れ、当然炎天下である。立っているだけで肌が焼けていくようだ。とはいえ、あの言葉の濁流に晒されるのもそれはそれで辛い。

宗像は中々出てこなかった。たかが会計に三分もかかるだろうか、もしかしてお金が足りなかったのだろうかなどと訝り始めた頃になって、ようやくドアが開いた。
「いやあ悪いね、盛大に小銭をぶちまけてね。ふう、いやあ、それにしても暑いね」
彼はスラックスのポケットに手を突っ込む。ハンカチを出すのだろうと考えた――だが次の瞬間、重そうな身体に似合わぬ俊敏さで、彼はこちらの腕を掴んできた。
「ち、ちょっと、何するんですかッ」
思わず振り払う。見れば、掴まれたところに黒い痕が残っていた。マジックか何かのインクだ。擦ったが落ちない。
「うわ、これ油性じゃないですか！　なんでこんなことするんですか！」
相手が向こう一月世話になる相手だというのも忘れ、苛立ち紛れに吐き捨てる。が、そこで言葉に詰まった。大黒天のような笑顔は、今やひどく冷たいものになっていた。獲物を追い詰めた蛇のそれに、嗜虐性を足したようだった。
「『なんで』、か。フフフ、なに、それはおいおい分かる――ところで蓮子くん、右手を上げてみてくれるかね？」
「何言って――はっ？」
素っ頓狂な声があがる。小学校でもしたことがないくらい高く、ぴぃんと、右手が

掲げられていた。街頭の往来のど真ん中でそんなことをするほど無邪気であるつもりはなかった。しかし、今の自分の姿ときたら、まるで参観日ではしゃぐ子供だ。
　周囲の好奇の目に晒され、顔を赤らめ、慌てて手を下ろそうとする。しかし、空間に磔にでもされたかのように、腕はいうことを聞かなかった。
「よし、よし、いいだろう。下ろしたまえ」
　低く冷たい、しかし満足気な声で宗像は言う。同時に、金縛りにあったようだった右手が、すっ、と降ろされた。腕を見つめるが、異常は見当たらない。
「フフ、驚いたかね？　自分の体が自分のものでないと知ったとき、誰もが、今君が浮かべているような表情をするよ。それにしても、騒がれずインクを塗布するだけのことに、長々喋るはめになったよ。どうも、私のような見た目のものがいきなり襲い掛かると、世間の娘さんはきゃあきゃあとうるさいんでね。結局騒がれたしな」
　饒舌さは変わらなかったが、うんざりするほど鷹揚な口調は、鳴りを潜めていた。今の彼の話し方は、陳腐なテレビアニメやドラマの悪役を蓮子に連想させた。
「何をしたの、私に」
「見ていただろう？　ただインクを塗っただけだとも。――ただし、私が開発した、特別なものだがね。効果のほどはわかったろう？」

その眼が、意味ありげな色を孕んだ。確かに、今塗られたものがただのマジックのインクでないことは、猿でも推測できる。腕につけられたそれにより、宗像の言葉は、自分に対して何らかの強制力を発揮しているのだ。

魔法のような話だった。まだ催眠術だのとでも説明されたほうが信じられる。だが実際問題として、今、右手は彼の意に沿って動いた――持ち主である自分を裏切って。

汗が頬を伝った。暑さによるものではない。ある疑問に、思考が至ったのだ。

――何故彼は、そんなものを自分に使った？

あのインクには、メルヘンな話だが、塗った相手を自分の意のままにする能力でも備わっているのだろう。そんなものを男が――特に、今の宗像のような男が――女に塗りつけ企むことなど、ろくなものであろうはずがない。

「何をされるか察したようだな？　ククク、安心したまえ、私も、年頃の娘さんに道の真ん中で手を出すほど馬鹿じゃない。やるなら自分の根城で、じっくりとやるさ。一ヶ月ほどな。ククク、楽しませてもらおうじゃないか？」

こちらの思考を覗いたかのようなタイミングで、宗像は無慈悲に告げた。

蓮子は青ざめた。自分がまな板の上に載せられた魚に等しいと悟ったのだ。その様を彼は楽しげに見つめる。

「さて、部下が待っているんだ。黙ってついてきたまえ。逃げるなよ？」
彼は命じ、歩き始めた。逃げねば。助けを求めねば。頭はそれを分かっていたし、身体に命令を飛ばし続けているのだが、無駄だった。両足は意識の制御を離れ、その背中を追い始めた。口は貝のように閉じていた。

パーキングまではさほど遠くなかったが、十キロほども歩いたように感じられた。肉体がいうことを聞かない状況というのはひどく奇妙で、全てのボタンを掛け違えたかのような違和感をもたらした。特に、逃げるという行為に関連した動作は、何一つ行えなかった。まるで、他人の視界だけ間借りしたかのようだった。
二人の――というよりも宗像の姿を認めたのだろう。隅に停められたミニバンから、男が二人降りてきた。どちらも、まともな企業の人間には見えない。
「おせェよ、おっさんよォ」
片方は、ロングヘアに金のメッシュを入れ、耳と唇にはリングピアスをぶら下げている。肌はサロンで焼いてきたような小麦色で、本人も意味を知らないだろう英語の書かれたピンクで半袖のTシャツと、ラインの入ったスポーツブランドのジャージを穿いている。肩を揺らし、アスファルトにサンダルを擦りつけて歩く様は、ちょっと

そこのコンビニに出かける、というような気楽さだ。誘拐行為に関わっているというシリアスさはどこにもない。
「手間かけすぎなんだよ。だから俺が行くっつったろが。社長みたいなおっさんが声かけるよりずっと楽だっての」
男はへらへらと軽薄に喋る。蓮子としては、むしろ彼に声をかけられたほうが警戒できただろうと思えた。彼のスナップショットに「身体狙いでナンパしてくる男」とキャプションを振れば、もうそれにしか見えないだろう。
「ふひッ、き、君が宇佐見蓮子ちゃんかぁぁ。お、おっ、思ってたよりずゥッと、か、かか、可愛いなぁ、ふへ」
もじゃもじゃした天然パーマの頭に、度のきつい瓶底眼鏡。痘痕面に団子鼻、豚を連想させる輪郭と突き出た腹。チェックのシャツはサイズがあっておらず、ボタンがはちきれそうになっている――これほど肥えていては、既製品で合う大きさのものは見つからないだろうが。色あせたジーンズもぱつぱつで、全体の印象として、巨大な風船を連想させる。鼻と鼻とがぶつかりそうな距離で見つめられ、思わず後ずさる。汗まみれの肉体特有の、酸っぱい臭いが鼻を突いた。
「おい何やってんだデブ。蓮子ちゃんビビっちゃってんじゃねぇかテメエ」

「な、なな、なんだよう、デブって言うなよぉ」
「うるせぇデブ。……なあ蓮子ちゃん、なあ？　あんなキモデブにゃ半径百メートル以内に近づいてもらいたくないよなぁ？」
金髪が、馴れ馴れしく肩に手を回してくる。せめてもの抵抗として、触らないでと跳ね除けると、彼は明確に苛立った表情を浮かべた。
「何気取ってんだコラ、……まーいーや。どーせ一週間も同じ態度でいられやしねぇ。すぐ自分からケツ振るようにしてやるぜぇ」
「おい藤森、いい加減にしろ」
「へーい」
「ひ、ひひ、良い気味だ。僕をバカにするからだ。僕をバカに――」
「山田、お前もだ。さっさとその娘にインクをつけろ。ドミニク！　お前も来い」
男たちに、和気藹々とした雰囲気はなかった。特に藤森と呼ばれる金髪と、山田と呼ばれる豚などは、互いに反目しあっているように思えた。宗像はそれを快く思っていないのか、わずかに苛立っているようだった。
「ハイ、社長サン」
運転席から降りてきたのは、二メートルほどもあろうかという黒人の大男だった。

スキンヘッドの上から野球チームのキャップを被り、ティアドロップ型のサングラスをかけている。タンクトップの上からでも分かるほど厚い筋肉が、大柄な身体の迫力をさらに強めている。厚ぼったい唇がへの字に結ばれていることも、見た目の威圧感を助長した。黒いスーツでも着ていたら、ボディガードのようにも見えたろう。

「へへ、コレで蓮子ちゃんは俺の言いなりだ。使い込んでやるぜェ」

宗像は藤森にマジックを投げ渡す。受け取るなり、彼は蓮子の腕に一本の線を引く。山田、ドミニクと順番が回り、彼らもそれにならった。

蓮子は青ざめていた。唇と膝が震えた。得体のしれない力が、自分をマリオネットのように操ろうとしている。害虫を部屋の中で見かけたが、本棚の裏に逃げ込まれたときのような不安と不快感を覚える。

そもそも、自由にできる女一人を連れ去り、男四人が寄ってたかってなにをするか？

――考えるまでもない。トリフネのときとは異なる恐怖が、彼女を襲っていた。

「フフ、まあそう怖がるな。さあ、車に乗りなさい。事務所に着くまでの間、お互いのことについて、もっとよく知り合おうじゃないか。なぁ？」

またしても驚愕した。車に乗れという指示で身体が勝手に動くことは、これまでのことからも予想がついた。だがまさか、「怖がるな」という言葉にまでインクの効果が

適用されるなどと、誰が分かるだろう？　その言葉が放たれた途端、恐怖心が消えた。油でいっぱいの皿に洗剤を一滴垂らす、ありがちなコマーシャルのようだった。
　インクの効果は、身体だけでなく心にまで及ぶ。それは、嫌だと思う心さえも剥ぎ取られうるということを、ふしだらな行いを自ら望むようにすらされうるということを意味する。心を掌握されてしまう――カリスマ性に惹きつけられるといったことの比喩でなく、文字通りの意味で。脅威以外の何物でもない。
　五人乗りのミニバンには煙草の臭いが残っていた。灰皿から溢れる吸い殻はまだ新しい。右隣を固める藤森の口から、煙の残滓が漂ってくる気がした。
　左から山田がのっしりと乗り込む。彼のふくよか過ぎる肉体のせいで、必然的に、金髪の方へ恋人のように身体を預ける形になった。続けて宗像が助手席、ドミニクが運転席についた。間もなくエンジンがかけられ、周囲の光景は無慈悲に流れ始める。
「逃げようと思わないことだ。君には一ヶ月、しっかり働いてもらうのだからな」
　藤森の側のドアを開けて飛び出せば、まだ逃げられるだろうか――浅はかな考えを見ぬかれ、釘を差された。それだけで、実行しようかという思いは雲散霧消した。
「どうだね？　これが私の産んだインクの力だ。これさえあれば、世界を牛耳ることも不可能ではない！　光栄に思うがいい、やがて世界を支配する力を、直にその身に

受けているのだからな……どうした？　返事をしないか」
「はい、宗像さん」
顎が開き、言葉を紡ぐ。レコーダーに録音したのを聞いているような奇妙さだ。
「違うな、宗像『様』だ。世界の王たる男に対して、『さん』は気安すぎるだろうが」
「申し訳ありません、宗像様」
宗像は陶酔しているようだった。無理からぬことだと、蓮子でも思う。思うがままなんでもできる力が自分に備わったら、とりあえず全部の単位を優にして、豪遊して……と、ひたすら己の欲望のために使うのは目に見えている。
うっぜェな、おっさんはよお、と、耳元で藤森が囁く。
「ンなことより、早く気持ちい（生）ー（ハ）こ（メ）とヤりてぇよな、蓮子ちゃんもよ。そうだな？」
「はい、気持ちいいことをしたいです」
付加疑問には、相手の望む応答で返すことになる――これも、インクの効果の法則のようだった。どうやら言葉で命じられる以上の影響を受けてしまうらしい。ただ、彼女の応答は藤森も予想外だったらしく、からかっただけなんだがなァ、と呟いた。
まあいいやと、太腿に掌が乗せられる。蛇が這ったように感じ、思わず跳ね除ける。
「チッ……『嫌がんな』、『拒否すんな』、『受け入れろ』やコラ。これでどうだ、この

アマ公が。手間かけさせやァがってよォ」
「あッ――」
「オレって優しいねェ。淫乱クソビッチになれって命令してもいいところをよォ」
再び手が乗せられる。今度は払い除けようと思わなかった。実際、できなかった。嫌だと思えないのだ。インクの力だ。地肌を、全く気を許していない男の手が這う。くすぐったさを感じながら、蓮子は無感動に見つめていた。
「……く、ん」
「へっ、蓮子ちゃん、これだけで感じてんのかよ。超敏感じゃねぇか」
「かっか、かーわいいなぁ蓮子ちゃんはぁ。ぼっ、僕はじゃあ、ここここっち触るよ」
丸々と肥えた指が胸へ無遠慮に伸び、女の象徴たる双つの丘を鷲掴みにする。
「んフッ。そんなにおっきくないけど、形の良いきれいな、お、お、おっぱいだなぁ。へ、へ、へへ」
「は、やッ、ぁんッ」
「お、おおお、こここっちも感度りょうッ、良好なんだなぁふひ、触られるのが好きなんだね、え、えっちな娘だなぁ」
ぶふぅんと、山田は荒い鼻息を噴き出す。股間で一物が盛大にテントを張っている。

悲惨な状況にありながら、彼女の瞳はなんの情動も映し出さない。あるべき感情は、彼らに剥ぎ取られていたからだ。
「よォ、こっち向けってェ。キスしようぜキス」
投げかけられた命令がインクに届き、身体を強制的に操作する。首から上の筋肉、彼の側を向くように動いた。
「当然、ベロ入れろよ。ほら来いって」
「ん、ぢゅ……はぷ、れる、ぢゅッ、ぺろ」
待ち構える藤森と、恋人に対しするような熱烈な接吻を交わす。漂っていた煙草の匂いを濃厚にしたような味だ。舌と舌とが絡まる様は、情熱的の三文字がぴったりだ。
その様に、触発されたものがいる。
「ふっ、藤森ばっかりズルいな、そそ、それなら僕も、剥いちゃうぞ、蓮子ちゃんを剥くぞぉぉぉぉん」
シャツのボタンに手がかけられる。言っとくけど邪魔するなよぉ、と釘を刺される。折角上がりかけていた腕は、力なくぽとりと垂れ下がった。
ぷちぷちぷちっ、と、小気味良い音とともに、前合わせが勢い良く外される。
「ひひ、かっ、かっわいらしいブラジャーだなぁ。これももういらないよね。ポイっ」

背中側に手が回り、ホックを器用に外す。薄桃色をした守護者は奪い取られ、やや小ぶりな双丘があらわになった。主犯である山田はもちろん、藤森に宗像、さらには黙って運転を続けているドミニクですら、視線をそこに向けた。男の性というもので、状況的・精神的にどれだけ優位に立っていようとも、灯火に集る蛾のように、そこに吸い寄せられてしまうのだ。

蓮子のその部位の美しさもそれに拍車をかけた。日焼けもせずシミもなく、しかも滑らかな白い肌は、透き通り、その下を走る静脈すらも窺わせる。先端は初春の桜のような鮮やかな色をしていた。わずかに充血しているのだ。大きすぎず小さすぎない、片手に収まる程度のサイズでバランスのとれた曲線は、素朴ながらも溜息が出るほど見事だった。

「ほおッ、お、おおおおおおおおおお」

山田などは実際に、大げさすぎるほど感嘆していた。眼球がぶつかるのではというほどの距離で凝視し、血走った目を肌の上で駆け回らせる。豚のような、んふゥウ、んフゥウという鼻息が、女の象徴に浴びせかけられる。

羽箒でなぞられたときのようなくすぐったさと、それ以上に羞恥を覚え、たまらず腕を組んで隠す。豚はその身を震わせ、ありえない、と言わんばかりの声で非難する。

「あああ！　駄目駄目駄目、駄目だよぉ、隠しちゃ！　折角の綺麗な、お、おっぱいなのに、ちゃんと見せてくれなっ、くれなくちゃあ！」
　言葉は呪いのように彼女を縛る。そして、傀儡を繰る人形師のように肉体を弄ぶ。両腕の守りは一瞬で瓦解した。またも守護者を喪った女の部位へ、欲望のたっぷりと籠もる視線が注がれる。
「ふひ、すごいなァ、こんな形の良いお、おっぱいが弄れるなんて」
　ソーセージのような指が、遠慮なく、しかしガラス細工を扱うようにそこに触れる。むにぃ、と、柔軟に形を変える。おほッ、と、山田はまたも大げさな感嘆をこぼした。
「おお、おおおお、りっ、理想のおっぱいだァ、ふ、ふふ、あじ、味も気になるなぁ、ンッ、ぶちゅ、ぢゅる、るるる、んんんんうううう、グッドだよぉおお」
「んふっ、んむ、んぅッ」
　太ったトドを連想させる舌が突き出され、わずかに尖る先端を舐め上げる。明太子じみた唇が、そこを挟み込んだ。赤子を思わせる様だった。ずいぶんとまあ、醜悪な赤子もいたものだが。
　人体は末端になるほど神経が集中する。ざらざらしたものに最も敏感な場所の一つを這われ、声を抑えることができなかった。それは口腔の粘液同士を絡めあっている

最中の藤森をも喜ばせたようだった。
「ぶはァ……へへ、美味エなぁ、蓮子ちゃんの口ん中はよぉ。さて、デブだけに好き放題させてらんねぇな。脚、開けよ」
命令を受け、両脚は工場のロボットのように自動的に開けられた。どこを触ろうとしているかなど明白だが、致命的なまでに嫌悪感を抱けない。
「いいよなァ、この脚。華奢なくせに妙にむちむちしてて、肌はすべすべで白くてよ。おっさんもいいタマ拾ってきたもんだぜ」
太腿を無でさすっていた手が、しだいに胴体の側へ、胴体の側へと近づいていく。つっ、つ、と、内腿へ。当然ながら、彼はそんなところでは満足しない。
「んんー……、これまた、色気のねぇ下着だなァ」
何のためらいもなく、スカートを捲り上げてきた。日焼けしていない白磁のような肌と、シンプルな、ブラとセットで買ったショーツが顕わになった。
先ほどのように、粘っこい視線が注がれる。それは液体のように、下着の内側まで侵食してくる。彼らが見ているのは物理的に見えるものではなく、その内でぴっちりと閉じたままでいる、秘めやかな貝なのだ。
「ま、清楚ってヤツなのかね。この流れで、実はスケスケのエロ下着穿いてますとか

言われたら、逆にビビるしなぁ。どんだけカマトトぶってたんだよってな」
「ん、ふッ、くぅ」
そうするのが自然だとでも言うように、指は下着へと伸び、布越しに秘唇をなぞる。当然、他人に触られたことなど一度もない場所だ。未体験の感覚だった。自分で触るのとは全く違う、腹の底から立ち昇る、ぞくぞくするような感覚。声を抑えるなとは言われていない。にも関わらず、抑えることができない。屈辱というと大げさだが、それに類する、負けた気分になった。
「へ、下着越しなのにこの反応かよ、すげぇ敏感だな……よし、それじゃあいよいよ脱がしちまうか。安心しろって、向こう一ヶ月、こんなもん必要にならねぇから」
「あ、待って、駄目です」
「駄目ってのは蓮子ちゃんが決めるこっちゃねェよ。もう俺らの玩具なんだからよ」
サイドに指がかけられる。するり、する、す、と、秘めやかな園を守る番人が取り払われていく。脚を閉じることすらできなかった。インクの力が見えざる手枷・足枷となり、彼女を縛ることで彼に味方する。脱がしにくいから足上げろよ、と呟かれる。やはり身体はその通りに動いた。
やがて守り手はいなくなり、彼女の聖域が空気に晒される。

「おおッ、へへへ、すっげぇ綺麗なピンク色してんじゃん。あんま男遊びしねぇ感じ？まッ、今どんなに綺麗でも、一ヶ月後にゃぁ黒ずんだユルユルガバガバの穴だけどな。可ッ哀想に。ひゃっひゃ！」

言葉とは裏腹に口調はひどく愉しげで、女を一人思うがままにできるという嗜虐的な興奮に満ちていた。指先が、密やかな花弁をゆっくりと、軽くなぞる。鼻がかった甘い吐息がこぼれる。

「中々良さそうな穴じゃないか。毛の手入れもしっかりしているようだな。感心だ」

粘ついた視線が、バックミラー越しに注がれる。濃いのを気にしてこまめに剃っている陰毛や、指先がささやかに嬲り続けている陰部などを、ねっとりと眺めている。

「自分のそれの形を、よく覚えておくことだな。藤森も言ったが、一月も経てば――いや、経たないうちに、男と見れば何でも咥える淫らな雌穴に作り替えられるんだ。初な娘には二度と戻れないぞ。フフフ」

「はい、宗像様。覚えておきます」

「そうだ、脱いだ下着を渡しなさい。どうせ君には不要になる品だからな。この私が有効活用してあげようじゃないか」

「ありがとうございます。どうぞ」

手が伸び、転がっていた下着を拾い上げ、自ら宗像へと渡す。受け取るなり、彼はそれを広げ、クロッチの内側をまじまじと見つめる。鼻先に押し当て、んふうう、と深く息を吸う。
「んん、良い香りだ。少女ならではの甘酸っぱい香りだな。これは私が預かる」
「はい。お願いします。ありがとうございます」
当然だろうと鼻を鳴らすと、彼は可愛げな布切れを胸ポケットに突っ込む。秘部を守るものが戻ってこないということは、彼女をひどく宙ぶらりんな気分にする。
外の景色を見やる。高速に入るところだった。入ってしまえば、逃走の公算はほぼゼロになる。彼女はそれを悲観するでもなく、危惧するでもなく、ただ客観的な事実としてしか受け止められない。逃げるなという制約は、力強く根を張っていた。
「さて、少し余興といこうか。蓮子くん、ここでオナニーしなさい」
「……はい、分かりました」
常識外れの要求すら、受け入れて当然といわんばかりに、言葉がするりと滑り出た。両腕が、乳房と秘裂へと伸びていく。左右からニヤニヤとした視線を投げかけられているのを感じる。そんな状況などお構いなしに、指先はそこに触れた。
「は……んッ」

桜色の先端と肉豆と、白い指は二つの尖りに同時に触れた。甘やかな感覚が訪れる。人に触れられるのとは違う、味わったことのあるものだった。それはちょうど、久々に実家で食事をしたときのように彼女に安堵をもたらす一方で、奇妙さと新鮮さをも与える。紛れもなく自らの行為であったが、自らの意志での行為ではなかったからだ。

「あ、や、はんッ」

楽園は朝露を浮かべる草花のようにわずかに濡れていた。二人から受けた行為が、官能の呼び水となっていた。くり、くりと指先が二つの突起を転がすたび、岩場から滲み出る地下水のように、潤みは豊かになっていくように思えた。

「んひぃー！　き、き、きもちよさそうだねっ、れれれ蓮子ちゃん。ど、どど、どうかな、きっ、きっ、きっ、きっ、きもちいーのかな!?」

「はい、オナニーするのはきもちよくて、好きです。乳首弄ると胸のあたりが暖かくなって、クリトリス、ツん、触ると、はぁっ、頭にまで、ぴりぴりするのが走って、く、ふぅぅっ」

自分の声が、自分のものでないようだった。望んで出したわけではないというのもそうだし、こんな甘ったるく鼻がかった媚びるような声を自分が出せるなどと、全く思っていなかったのだ。

「くく、ずいぶんとオナニー慣れしているようじゃないか……そうだ、藤森、山田、両脚を抱えてやれ。前の車の連中にもおすそわけしてやるんだ」
「ヘッ、おっさんにしちゃ良い発想じゃねぇか。おらデブ、そっち持て。ッせっと」
軽々と、両脚がVの字に掲げられる。股座を前方へ突き出したような体勢にされた。フロントミラーに、己の痴態が大写しになっている。これなら確かに、前の車からも見えるだろう――レンタルらしい軽自動車に、大学生とおぼしき男たちが乗り込んでいた。少なくとも蓮子にとっては幸いなことに、誰も後ろを見ていないようだった。一方の宗像は、不満げに鼻を鳴らす。
「ふん、つまらん。鈍い連中だ。アダルトビデオでしか見られない光景が、すぐ後ろに転がっているというのに。どこに目玉をつけているんだ」
「あっ、はッ、くぅん、ンぁ！」
興ざめだと、彼は付け足した。その間にも、蓮子の可愛げな指は、湿り気を増してきた自分自身のクレヴァスや肉豆を弄りまわしている。絶え間なく訪れる電気信号に、声帯はしきりに震えていた。抑えるな、などと、言われてもいないというのに。
「蓮子ちゃん、お、おなおな、オナニー、すごいじょうずだねぇ、ももしかして、覚えるの早かったんじゃないかな、いいいつ覚えたのかな、おしえっ、教えてよ」

言葉を受け、脳は強制的に記憶を辿っていく。自分でも覚えていなかった時分まで。そんな頃のことが、まだ頭の中に残っていたのかと、ある種の驚きを覚えた。

「ん、は……多分、×学三年生の頃だったと思います。鉄棒で遊んでるときに、鉄棒、股に擦りつけたらふわふわするって気がついて、んく、はぁん！　……そのうちに、頭がっ、くぅ、真っ白になって、なんにも考えられなくなって……今思えば、あれ、イッちゃったんだと思うんですけど、そのときは、ただもう、それに夢中になって」

話している間も、指は別の生物のように神経の集中する部位をつつきまわしている。それに合わせて、声に時折、切なげなものが混じる。

気持ちよさそうだな、と思った。他人事のようだが仕方ない。なにせ不随意な行為なので、己の身に起きていることだという実感がわかなかい。あるいは、嫌悪や羞恥という人間的な感情を無理に奪われたことによる、副作用だったのかもしれない。

「ぐふッ！　そんな頃からイける身体だったのかぁ。ひっ、ひひ、やらしいねぇ？　さ、さ、さあ、続けて？」

「オナニーなんて言葉すら知らなかったけど、自分が覚えたのがいけないことだって、悪いことだっていうのは、なんとなく分かってました。っ、でもたまに、お腹の奥がどうしようもなく熱くなって、そういうときは我慢できなくなって……見つかったら

怒られるって、ンッ！　思ったから、部屋とかお風呂とかで、こっそりしてました」
「はっはっ、発情しちゃったのかぁ。えっちなおんっ、女の子だったんだねぇ。どど、どういう風にしてたの？」
　山田は次から次へ、根掘り葉掘り質問を投げかけてくる。それに正直に答える声を、他人の人生についてのドキュメンタリー番組でも見ているような気持ちで聞いていた。なにせ、自分でも覚えていなかったことだ。古い子供部屋を発掘している気分だ。
「道具とかないので――そんなのがあるって知らないので、指とか、シャワーとかでしてました。――でもある日、シャワーを強くしすぎて、思いっきり声出しちゃって、それ自体は気持ちよかったけど、母にバレました」
　そんなこともあったな、と呑気なことを思う。そして、待てよ、と違和感を覚えた。母にバレたことは、「どんな風にしたか言う」という命令の範疇にあるのだろうか。
「あらら、ぶふっ、お、怒られただろうねぇ」
「はい、……だから、家の中では、んっ！　できないなって思って、外でするようになりました。学校のトイレとか、放課後の教室とか、なるべく見つからない場所で」
「へえ！　ひっ、ひひ、そんな頃から野外オナニーに目覚めてたんだ。へっ、へっ、へへっ、変態さんなんだねぇ、蓮子ちゃんって！」

「見つかったらそういう風に呼ばれるってことは、なんとなくだけど分かってました。でも、気持ちいいっ、のの、中毒みたいになって、あふっ、ン、自分がしてることが何なのかも知らないくせに、やめられなくなってました」

やはり妙だった。今は何も命令されていなかった。それでも口は勝手に動いた――誓って、自分で話してなどいない。単に相手を言いなりにする以上の効果が、インクにはあるのかもしれない。といっても、その推測が事実だったとして、彼女の状況がましになるということは、ありそうもない話だ。

「それがオナニーだと知ったのはいつだ？　君のような娘だ。まっとうなルートで無味乾燥な情報を得たのが最初だというわけではないだろう？」

宗像がミラー越しにこちらを見ている。好色かつ猥雑な視線が、転がされる肉粒や、ぬかるむ秘穴を犯している。体の奥まで見通してやるぞとでもいわんばかりだ。

「だんだん、学校でするのが物足りなくなってきたんです。飽きちゃって。たぶん、気持ちいいのとかより、バレるかもしれないっていうのとか、外でこんなことしてるとか、そういうのが好きだったんだと思います。……ッあ！　それでっ、だんだん、校外でもするようになりました。いやらしい本が捨てられてるって男子が言ってたの、どうしても気になって、家の近くの河原まで行って」

「橋げたのエロ本か。伝統的なルートだ。野外でオナニーする娘にはお似合いだな。ちと古典的すぎる気もするが……、それで？　他にはどうだ？」
「そのころから、オナニーの回数は減っていきました。それよりももっとすごいことがあるって知ったからだと思います。でも、いやらしいことをする頻度は減りませんでした。ッ、くぅ」
「ほう、例えば？」
「プールの授業のとき、んっ、泳いでて水着が脱げたふりをして、胸を出してみたりしました。男の子が一人、見てましたけど、何も言ってきませんでした」
「露出にも目覚めたか！　ふん。もともと淫らな質があるようだな、良い拾いものだ。……それだけ色々してきたなら、さぞ男と遊んだのだろうな？　そら、言ってみろ、どんな連中と、どういう風に寝てきたんだ。事細かに教えるんだぞ」
　蓮子は口ごもった。というよりも、勝手に動き続けていた口が止まった。それは、宗像にとっても予想外だったらしい。訝しげに眉を吊り上げた。
「どうした？　早く話さないか。遊んだという表現が理解できないか？　セックスを何度したのか、どう抱かれたのか、答えろと言っているんだ」
「ありません」

一瞬、車内の空気が固まった。全員が、蓮子の顔を見つめていた。
口を開いたのは、ドミニクだった。
「……ヴァージン、ってコト？」
ヴァージンの部分だけ、やけに流暢な発音で、一言だけ尋ねてきた。インクの効力は、今度は止まることなく質問に反応する。
「はい、私はまだ、処女です」
「ッヒャァ、マジかよ！　大学生だろ！　へへ、たまんねぇ、今すぐ奪ってやるぜぇ」
藤森は血相を変え、ジャージを下ろそうとする。怒号が飛んだ。
「藤森ィ！　その娘の貞操を奪うのは私だ！　貴様は座っていろ！」
宗像は鬼のような形相で彼を睨みつけていた。勝手なことをすれば殺す、と言わんばかりだった。藤森の動きがぴたりと止まる。大きな舌打ちをしてから、ぼすん、とシートに腰を落とした。激しく貧乏揺すりをし、二三度、前部座席を蹴り上げる。
「ふん、それでいい。大体な、誰のお陰でいい思いができていると思っているんだ？　誰が優先されるべきかなど、考えるまでもないだろう。その足りない脳味噌（サル以下の頭）で少しは考えることだな」
藤森は答えなかった。ただ、宗像を睨みつけ、小さな舌打ちを繰り返していた。

「おっ、前の連中が気づいたようだ。蓮子くん、見せてやりなさい」
「はいっ、んッあ、は、あぁはッ！」
前を走る軽から、複数の視線が向けられている。同年代くらいだろう男子の視線が。遠すぎて詳細は分からないが、顔に見覚えがあるような気もした。大学生のようだし、案外同じ学科の人間なのかもしれない。——もしそうだとして、相手が自分のことを知っていたら、そして自分が何者か気づいたなら、社会的な死すらありうる。しかし、蓮子には、そのことに対する恐れはなかった。怖がるなという宗像の言葉は、未だに彼女を縛り付けていた。昔の話をしたことで、当時大好きだった——その頃はそれを何と呼ぶのか知らなかったが——背徳感とスリルとを思い出していたというのもある。
「はぁッ、あっ、んくぅうッ！」
くち、くちゅっ、くちゅっと、肉を捏ね回す濡れた音が、エンジン音に紛れつつも車内に響き渡る。とんでもない姿を晒している。思えば思うほど、嬌声は止まらなくなる——それは嘘だ。彼女は既に、そんな健気な努力、とっくに放棄していたからだ。抑えたところでどうせ命令の力で無理矢理喘がされるだろうというやけっぱちな予測の中には、「我慢しないほうが気持ちよくなれる」という、昔の己からのメッセージが混ざっていた。

「ひッ、ふひ、えーろいなァ、やーらしいなァ」
「見てみろよあいつら、カメラ取り出したぜ」
　左右の男たちは、下衣をずらして一物を取り出すと、蓮子の両脚を抱えながらも、空いた片手で扱き続けていた。ずっと昔、橋げたに捨てられてぱりぱりになった本のカラーページを強引に開いて見たそれ。今、ネット上のいかがわしい動画で、なんのモザイクもかけられていないのを見るそれ。――本物を見るのは、初めてのそれ。
　声がにわかに高まる。異性の痴態に昂ぶりを覚えるのは、なにも男ばかりではない。
　大学生たちは、一生に二度と見られないだろう光景を忘れまいという努力に忙しいようだった。この絶景を少しでも鮮明に己の脳に刻み込まんと、目を血走らせ、白い指の動きを、細い腰のくねりを、蕩けていく可愛げな相貌を凝視する――その一方で、脳などという曖昧な器官のどこが信用に足るのだ、その点電子データは劣化しないと、携帯やデジタルカメラのボタンを連打していた。
「はぁんッ、あぁっ、ふぁっ、ッひ、く、っう、うぅうっ」
「へっ、気持ちよさそうにヨガりやがって。見られるのが好きなんだろうが、ええ？言ってみろよ」
「あぁっ、はい、すきですっ、見られるときもちいいのっ、普通に触るよりもぉっ」

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅと、水音は間隔の短い、絶え間ないものになっていた。肉真珠（クリトリス）はたった今水揚げされたばかりのようにてらてらと輝いていた。であるなら、秘裂は海溝で、陰毛はその周辺に自生する海藻だ。くろぐろとした毛は、彼女自身の愛蜜に濡れそぼっていた。

「はぁッ、あぁッ！　ンッ！　ひゃ、あっ、はぁぁ！」

声が高まっていく。指の動きは際限なく加速し、腰はがくがくと跳ねる。節操なく飛び散った汗がぱた、ぱたた、と座席を汚し、染みを作っていく。

――きもちいい。

頭の中にあるのは、それだけだった。今自分がどんな危機的状況にあるか、どんなとんでもないことをやらされているのかなど、思考の埒外に放り出されていた。

ずっと昔から幾度となく味わってきたエクスタシーは、衆人環視の下であるがゆえ、初めてそれを知ったときのような新鮮さを伴って、彼女の下を訪れようとしていた。

「フフフ、イキそうなのか。よし、イけ。これから私の下で心まで調教される、その記念すべき一回目の絶頂だ。よぉく覚えておくんだぞ。ほら、連中にも見せてやれ、見られながらいやらしくイき狂うところをな！」

「はいッ、イきます、クリトリスいじって、皆に見られながらイきますぅっ――はぁ、

あッ、あはぁぁぁぁッ！」
一際高い声が放たれ、狭い空間内を跳ねまわった。陰核を思いっきり引っ掻くと、ギリギリだった官能は一瞬で限界を迎えた。背や腰は本来とは逆の方向に反り返り、臀部がシートから浮かび上がる。太腿、ふくらはぎと筋肉は限界まで収縮した。淫裂から飛沫が迸り、座席や足置きを濃厚な女の匂いでマーキングする。
彼女は一瞬タイムスリップしていた。鉄棒に股座を擦り続けて達した、あの瞬間に。なにこれ、こんなのしらない、でも、きもちいい。そんな思いが、頭の中を満たしていた。
「はぁ、あ、んは、あぁぁ……っ」
ようやく両脚が解放される。ぐったりと、座席に身を預けた。鮮烈な体験（アクメ）だった。身を焦がすようなという形容がどのようなものであるか、まさに今思い知った。日頃の自慰行為が、どれだけ無味乾燥とした、無感動で作業的なものだったかも。
「フフフ、いいイきっぷりだったぞ。やはり女というのはあれくらい乱れなくてはな。……さて蓮子くん、疲れているところ悪いが、君の艶姿のせいで、どうにも収まりがつかなくなった者が居るようでね。相手をしてくれたまえ、口と手でな」
「ふひっ、れんっ、蓮子ちゃん、とっ、とってもかぁわいくってやらしかったよぉ、

僕のおちんちんもビンビンだよぉ」
肩に手を回し、山田は蓮子を引き寄せようとする。だが、宗像がそれを留めた。
「待て。……藤森、最初はお前にくれてやろう」
「あ？　どういう風の吹き回しだよおっさん」
「なに、さっき怒鳴った分のお返しだ。いらんなら山田にくれてやるが？」
「いらねぇとは言ってねぇ。俺だってブタにこんな上玉みすみす食わせたかねぇよ」
丸々と太った手を払いのけ、藤森は彼女の腰を抱くと、自分の方に引き寄せた。
「へへっ、今の姿、なかなかエロかったぜ。お前のせいで勃起が収まんねぇよ。ほら、さっさと責任取れよ、そのカワイイお口でよォ」
「んんッ」
頭を掴まれ、そのまま押し下げられた。眼前に、勃起したペニスが現れる。それは本やネットなどで見るよりもずっとグロテスクで、凶悪であるように思えた。独特の匂いを放つそれを、彼はぐいぐいと頬へと押し付けてくる。
アダルト雑誌やいかがわしいビデオの女優がするものと考えていた行為を、自分がする――それも、恋人でもなんでもない男に。
本来なら、泣き叫ぶところ。しかし彼女は、一物をぼうと見つめるばかりだった。

奪われた嫌悪感は、まだ戻っていない。……あるいは、戻ってきてはいるものの、発揮されていないのかもしれない。強烈な快感に、頭は狂わされていた。
仮にインクの強制力がなかったとして、この命令を拒否できたろうか？
「失礼、します。は、あ」
口が開かれる。インクの力によるものか、はたまた己の意志によるものか、もはや判然としない。ただ、これからせんとしている行為に、胸は高鳴っていた。
「かぷ」
咥え込む。やや塩気のある、生臭いような風味が口に広がる。物理的にはそれだけのことしか起こらなかった。しかし、彼女にとっては、大きな意味を持つ出来事だ。
――口の処女が、永遠に失われたのだから。
「おっ……よし、いいぞ。フェラも初めてなんだろ？　俺が教えてやるよ。いいか、歯を立てないように舌と頭動かせ。頬をすぼめて吸い付くんだ」
「ん、ぢゅる、ぐぷ……んっ、ん」
言われたとおりに、身体は動く、あるいは身体を動かす。知らない男にかしずいて、こんなことをしているなんて――それは、とてもいけないことだ。ずっと昔に感じ、病みつきになったあの思いが蘇る。達したばかりの秘裂から、新たな蜜が滴り落ちる。

「ずず、ずるいぞ、藤森ばかり。蓮子ちゃん、僕のも弄ってよほら、お手手使って」
腕を掴まれ、ぐいと引き寄せられる。なにか温かい、弾力のあるものを握らされた。
それが何かなど考えるまでもないが、視線をやる。硬く勃起した、しかし皮を被ったペニスが、己の掌のうちにあった。
「あぁっ、蓮子ちゃんのお手手！　お手手！　すべすべ！　ほぉぉっ、蓮子ちゃん、そのまま扱いて、ゴシゴシしてくれるかなぁッ」
たったそれだけで、山田は狂ったような声を上げる。命令に従って身体は動き――動かし――皮の上から掌でゆっくりと擦ると、喚き声はさらに大きくなった。
「んぢゅ、んっ、くぷ、んむぅ」
「へへ、いいぜぇ。もっと深くまで咥えるんだ。間違っても歯ぁ立てんじゃねぇぞ。立てやがったらぶっ殺す。いいな？」
「ほぉぉーッ！　蓮子ちゃん！　きもちぃーよ蓮子ちゃん！　すすすすぐ射精ちゃいそうだよビュルルーっておほぉぉッ！」
三者三様、音と声を上げながら、性の宴に溺れていく。
「ア、社長サン、アレ」
だが、それを邪魔する者がある。初めに気づいたのはドミニクだった。宗像もすぐ

確認した。事故でもあったのか、警官が検問を行っている。
「うげ……高速でんなことやるかよ普通。おい蓮子ちゃん、一旦中断だ中断。流石にポリ公に見つかんのはマズイだろ、色々」
「まあ待て。このまま行け。お前も中途半端なところで止めたくはないだろう？」
意外にも――少なくとも蓮子にとっては――理性的な判断を下したのは藤森だった。そして、それに対立したのは、同じく意外にも宗像だった。今までの会話から考えるに、逆であるほうが自然に思えた。
「いやそりゃ無茶だろ。どう言い訳すんだこれ。見逃されるとか有り得ねぇぞ」
「わからんやつだな。私が今握っているのは何だ？」
ニヤリと、ミラー越しに見える彼の瞳は、邪悪に歪んでいた。それで藤森も合点が行ったか、なるほどね、と呟いた。
一同を乗せた車は、検問に差し掛かる。宗像は窓を開ける。その手にはマジックが握られていた。
「すみません、ちょっとご協力いただきた――ッ、君たち、一体何をして」
新米だろう若々しい警官が覗き込み、そして目を見開いた。通りがかった車の乗員が性行為に励んでいたともなれば、驚かないはずもない。しかしその感情は、すぐに

掻き消えることになる。
「騒ぐな。通せ。他の連中に怪しまれないようにな」
彼が驚いた隙を突いて、宗像は彼にインクを押しつけ、低い声で囁いた。途端、彼の声は、ミュートでもかけたかのように消え失せる。そしてその上から、別の言葉が再生された。
「……失礼いたしました、どうぞお通り下さい」
「ご苦労」
恭しげな礼を捨て置き、車は発進した。周囲になんらの疑問も与えず、さも当然のことのように。
「残念だな蓮子くん。警官が見れば助けてもらえると思っていたかね？　言ったろう、このインクは世界を牛耳る力をもつんだ。あの程度、ティッシュよりも薄い壁だな」
「ん、ぢゅる、くぷ、ッ、ふぅむ」
勝ち誇ったように語りかけてくる声に対し、悔しいとも、無念だとも思わなかった。逃げようという考えはそもそも縛られたままだったのだから。あるいは心のどこかで、これから始まる一月の行為が、どれだけ気持ち良いものになるか、期待していたから。